

# 認知症を かんがえる



心  
血  
医  
院

院長 和田豊郁

医師 医学博士 産業医 健康スポーツ医

## 和田豊郁 略歴

1958年 熊本県生まれ  
1977年 ラ・サール学園卒  
1978年 修猷学園卒  
1984年 久留米大学医学部卒、医師免許取得、内科学(3)入局  
1993年 久留米大学病院循環器病センター副外来医長(筆頭無給助手)  
1994年 久留米大学病院東9階病棟医長、助手(有給)  
1994年 博士(医学)取得(肥大型心筋症のBMIPPシンチグラフィ)  
1996年 久留米大学病院情報部 助手  
1998年 久留米大学病院情報部 講師  
2002年 医療法人天神会 医療情報部部長  
2005年 久留米大学病院情報部部長 准教授  
2015年11月20日 心血医院(こちいいん)開設

五感を使って、それが何であるかを記憶に基づいて考え、判断し、どうするかを決める、一連の脳の機能を認知と言います。会ったときに誰であるかが分かり、ニッコリと微笑むことも認知ですし、キンモクセイの匂いがしたらいれを連想するのも認知と言えるでしょう。こういったことができなくなると認知症と言われます。

野生の動物や動物園のゴリラやチンパンジーには認知症はないようです。しかし柴犬には飼い主の言うことが分からなくなったり、徘徊したり、奇声を上げたり、食べたことを忘れたり昼夜逆転したりと、人の認知症と同じようになることがあるようです。ところ

が犬よりも長生きする猫には認知症はみられません。

犬と猫とは何が違うのでしょうか？

猫はネズミを捕らえて食べるなど野性的な性質を忘れずに持っています。ところが、犬は人と暮らしているうちに人が食べているものは何でも食べたがるようになってしまったようです。

哺乳類は、生きている動物、地面から立っている木や草、風にそよぐ葉、自分で採った木の実といったものを食べます。生命を絶たれると腐敗し、それを食べれば病気になる命を奪われるということは知らなくても、イヤな臭いや味がするものは口にしないものです。

人は食物を保存し、飢えに対する対策をしますが鮮度管理の基準が甘くなり「まだ食べられるかな？」と冷蔵庫を開け昨夜の残り物のエビフライを食べたりしてしまうわけです。それこそ、犬も食わぬようなものも「もったいない」と食べるかもしれません。生の食材は時間が経つと臭くなったり、しなびたりして、もはや食べ物とは思わなくなり、もしくは、食材を炒めたり揚げたりすると腐敗菌は死滅しますが、少時間経つても臭くなります。少なくとも食中毒で命を落とすことはいけません。それで火を通しておけばずつと食べられる、という認識があるわけですが、調理直後にはあんなにお

いしかったものが時間が経つとおいしくない。これは、加熱や空気中の酸素によって食材中の蛋白質や脂質が変性するからです。この変性したものを食べるのは人とそれを欲しがらる犬だけです。

他の哺乳類にはみられない認知症が加熱調理をして時間が経ったものを食べる人と犬にだけみられるのは偶然ではないように思われます。

新しいものを新しいうちに、おいしいものをおいしいうちに、加熱調理したものは温かいうちに食べることが認知症予防になりそうです。

認知症と生活習慣病にも深い関係があります。高血圧症や糖尿病は動脈硬化を起すリスクであり、脳血管性認知症、まだら認知症を起します。記憶力が低下したり欠落したり、別々の記憶が組み合わさったりする一方、判断力や理解力は比較的保たれます。だんだんと自己中心的になり、自分は絶対に正しく、思った通りにならないと許せません。小児の理論におとなの体力、という状況になり、ケンカに発展することも珍しくありませんし殺人に至ることもあります。

高血圧症や糖尿病は自覚症状が出にくい病気ですが、認知症にならないために治療するのだ、という意識を持つて取り組むのがよさそうです。